

---

# ゆーすふるDays！

村沢祐輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆーすふるDays！

### 【コード】

N0695P

### 【作者名】

村沢祐輝

### 【あらすじ】

一見気楽な彼らの友情。実は真面目な彼らの日常。その間に横たわる匿名の恋愛模様。すべてを一言で言い表すならば、それは「青春」。

漫然とした中学生を送り、これまた漫然と受験勉強に取り組んだ当物語の主人公・桐咲<sup>きりさきげん</sup>は、やはり漫然とした心持で高校へ進学し、世に良くある漫然系高校生となった。

これといった夢や目標は心にはなく、将来の自分というものを思い描く想像力はどうしようもなく欠如していて、高校に進学した理由も「それが世間の常識だから」と根拠薄弱。そのわりに「学校は学業と人間形成の場である」という世間常識には都合よく目をつぶり、貴重な日々を趣味のテレビゲームとパソコンいじりに費やしているサマは、いずれモラトリアム人間になるだろう片鱗を伺わせるものだった。

とにかく、桐咲は人間としてしょぼい。

自他ともに認める並々ならないしょぼさがそこにはあった。

彼の周りには彼と同様にしょぼい人間が幾人か集まって、生暖かい視線を注ぎたくなるしょぼい友人関係を形成している。類は友を呼ぶという病気の典型的な症例だ。

この狭い世界からいかなるポジティブな生活習慣も生まれはしないだろう。ひたすら自堕落に染まる土壌が、そこには十全に形成されている。

今が楽しければ、それでいい。

一寸先は闇という言葉もある。今がんばったところで、その成果が報われるかどうかはまさに闇の中だ。

偉人ばりの努力をしたところで、明日交通事故に遭ってあっさりあの世へ旅立つ可能性はゼロではない。いつどんな目に遭うかわからないこの世の中で、努力に執着しろというのもなかなか説得力を持たない話だ。

だったら、先の見えない努力なんて放棄して、ただひたすら愉楽に生きようじゃないか。

それが青春生活というものだろう。  
桐咲玄はそう考えていた。

しかしそれはあまりにも楽観的で都合主義的な考え方だった。  
青春を享受するのに必要な最低限の努力の存在を、高校に入学したてのこのとき、彼はまだ自覚していなかったのだ。

彼がその自覚に至り、後悔も後先たらずに愕然とすることになるのは、入学の日より一カ月後。

北国の気候もあって、他の地方に遅れてようやく桜の花見が賑わいを見せ始めた、五月のゴールデンウィークを明けてのことだった。

「突然だが宮坂。俺の日々を構成する趣味の数はいつたいいくつあると思う？」

「やぶからばー」

それは実際唐突な問いだった。その直前までの話題は「ロールプレイングゲームの作業を効率よくこなしながら学校の宿題に取り組むことの難しさ」にまつわるもので、それなりに議論的盛り上がりを見せていただけに、突然の話題の方向転換は宮坂茜に「みやさかあかねやぶからばー」以外の感想を抱かせなかった。

時間は昼休み。場所は高校の教室。

桐咲玄と宮坂茜のだるだるコンビはいつものように一つの机に椅子をつき合わせて昼食をとりつつ、あまり建設的とはいえない会話に興じているところだった。

「突然だけど桐咲君。私の叔父さんが経営しているちっちゃな工場で日かな寡黙な作業に没頭している工場員さんの数はいつたい何人だと思っ？」

「おい宮坂、俺の質問をやぶからばーの一言でスルーした拳句なんだそのわけのわからない出題は。どういっつもりだ」

「やぶからばーでしょ」

「確かにやぶからぼーだ。しかし今の俺の質問とお前の質問とではやぶからぼーの度合いが違う。いったい全体、工場員さんの数を俺が言い当てたとしてそこからどんな話題が広がっていくっていうんだ」

「言い当てられはしないよ。私の作り話だし」

「無駄すぎる」

桐咲はうんざりしたように首を振った。入学翌日に友人となったこの素晴らしく気の合う女は、しかし気が合うばかりではなく、どうにも扱いにくい性質を同時に併せ持っていた。

その性質がどのような性質であるかは一言では十分に表現できないが、それでもあえて表現するならば、

「面倒くさいやつだ」

などと言いつつも、桐咲が彼女に淡い感情を寄せているというのもまた事実であるのだが。

そんな苦々しい事実はおくびにも出さず、桐咲は彼女を睨みつける。

「で、俺の日々を構成する趣味の数。ハウ、メニー。いったいどれだけあるでしょうか？ とつとと質問に答えやがれ」

「そんなこと言われてもな。私、別に君の趣味とやらに詳しいわけじゃないし。だいたい質問の意図が見えないよ。それこそ、その質問からどんな話題を膨らませるつもりなの？」

「それはお前の答えを聞いてから話す。まずはアンサーだ。一にアンサー、二に解説。参考書や問題集と同じ形式だ」

「私は問題を解かずに答えを見ちゃうタイプなんだけど」

「うるせえ、いいから吐け。カレーパンぶっけんぞコラ」

「打ち返してやる」

宮坂はコッペパンを野球バットのごとく構えた。それもバントの構えだ。確実にバットに当てようという消極的な意欲がそこには伺える。

ついでに言えば、会話というものに対する彼女の姿勢も、そこか

らはにじみ出ていた。

「お前はバットじゃなくてグローブを身に着けるべきだと思っ」

桐咲はカレーパンの投擲を諦め、それを口に入れた。安物のカレーの味が口に広がる頃には、質問の投擲も諦めつつあった。

「まあいいか。お前がどんな答えを口にしようが、俺がこれから話そうとしている話題に変わりはないからな」

「ならとつとと答えと解説をしちやいなよ。へいへいカモン」

コッペパンバットをゆらゆらさせながら宮坂は言う。彼女は後に食べ物玩具にした罪で罰を受けることになるのだが、もちろん今の彼女には知りえないことだ。

「答えは三だ」

桐咲は指を三本立て、宮坂に突き出す。宮坂はその堂々とそり立ったトリオを見て唾然としたようにつぶやく。

「爪ながっ」

「それ以外の感想はないのか」

「数少なっ」

「よろしい。では解説に移ろう。その三つの趣味の内訳は次の通りだ」

「いわく」

一、テレビゲーム。夢と冒険に満ちたファンタジー。

二、パソコン遊び。知的探求とムフフな電脳世界。

そして三。

突き出した薬指を震わせながら、桐咲は口を動かした。

「テレビ観賞だ」

ゲーム、パソコン、テレビ。

何という文明社会だろう。生活を豊かにするはずの文明の利器たちが、前途有望な若者を侵食し、目標と努力に彩られるはずの日々をかくも無惨なものに墮落せしめているとは。

「なんというか、ひどく退屈な趣味だね」

「まったくもって正論すぎて恐縮だけど、お前は人のことを言える

のか？」

「言えないね……」

宮坂は物憂げに溜息をついた。彼女にしたって、趣味の品数という点では桐咲とそう変わるところはないのだ。

類は友を呼ぶ。

桐咲の趣味が退屈極まりないものなら、宮坂の趣味もまた然りだ。ゲーム、パソコン、テレビ。

しめて三点。

三というリアルな数字に、二人は昼休みの和やかさも忘れ、ただ打ちのめされるのだった。

「これが俺たちの青春だ」

「むごいことを言わないで」

「ゲームとパソコンとテレビ。ひきこもりの趣味と寸分変わらない、まさに黄金トリオだ。俺たちとひきこもりの違いは、学校に行ってるか行っていないか、ただその一点に尽きる。思うにこれは紙一重だ！」

「口を閉じなさい。口を」

「いったいどうしてこうなってしまった？ 高校生が甘受すべき青春とは、もつとこう、甘酸っぱくて切ないような、そんな感じのものであるはずだ。だが俺たちの青春には甘酸っぱさや切なさなんてどこにも見当たらない……ただただ虚しさが広がるばかりだ」

「コツペパンぶっけんぞ！」

いきり立った宮坂がコツペパンを振りかぶる。それは形状的に言えばボールというより槍だ。かじった跡を刃の切っ先に見立て、彼女は桐咲の顔面に狙いを定める。

「この虚しさの理由はなんだ？」

「だまれだまれ」

「答えは明確だ」

「桐咲のバーカ！」

「俺たちが部活に入っていないからだ」

桐咲は厳かにそう結論付け、飛来したコップパンを口で受け止めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0695p/>

---

ゆーすふるDays！

2010年11月27日21時40分発行